

## 近世農村社会における子どもをめぐる社交

——甲斐国山梨郡下井尻村依田家文書を手がかりに——

太田素子

はじめに

一 近世社会における子ども期の通過儀礼

——その階層性と地域性について——

二 依田家の祝儀簿にみる村落社会の子育て

結び 祝儀簿と子育て慣行の地域性

### 論文要旨

依田家文書には享保年間から明治中期に至る九十三冊の贈答控え帳が残されている。内訳は婚姻祝儀四十冊、歳暮控帳三十二冊、出産祝関係十一冊、抱瘡見舞八冊ほかであるが、この出産祝と抱瘡見舞という子どもに関する交際の記録を、『諸国風俗問状答』にみられる産育儀礼の地域差・階層差と比較して、依田家の儀礼の執り行い方とその中に現れた子どもに対する関心の特質を探ることが小論の課題である。

『諸国風俗問状答』は年中行事中心に地方の民俗慣行を報告したもののだが、文化末年の通過儀礼の実態についても、そこから全国的な視野で仮設的な見通しを得ることができる。例えば小笠原流に定式化される形で武家には七五三が定着しているが、農村では乳児期の産育儀礼のほか元服まで儀礼を持たない方が一般的である。しかし城下町を通じて次第に七五三が民衆に浸透しはじめている側面も重要で、三歳のみ、あるいは袴着も早めに行う形で七五三の一部を

受容するタイプ、逆に七歳九歳に元服儀礼の一部が下りてくる形で七五三の影響を受けているタイプ、また七五三の影響は小さいが初節句を盛んに行う形で通過儀礼が増えて行くタイプなど、子ども期の儀礼への関心の強まりが観察される。この仮設的な見通しは、少なくとも依田家周辺の山梨県下や史料館所蔵文書の範囲では祝儀簿の残存状況ともよく対応している。

依田家文書の子どもをめぐる儀礼は、出産祝と七夜・産屋明き祝儀など出生初期に贈答が集中する農村の伝統的な慣行を表している。また抱瘡にも見舞と贈答が取り交わされるなど、子どもの成長の様子に関心が払われるというより、子どもの生存そのものに関心が寄せられる点に特徴がある。また化政期を境に産屋明きより七夜がお広めの機会として重視されていく様子や、医師の出産立会いの開始などを観察することができる。